

# しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会/浜風会会報 No.16

## 昭和の時代盛んだった 「青年団活動」

今は姿を消しているが、この地域の若者に勇気と連帯をもたらした、昭和の一時代を築いた「青年団活動」について掘り起こしてみたい。  
古くは明治四十三年発会の青年会

『篠原村誌』によれば、「篠原村青年会」が学校教育の補習、風紀の改良、有益の娯楽を取ることの目的をきっかけ、発会した。また同時期に「馬郡青年会」も発会している。いずれも十五才から二十五才くらいまでを対象に、地域をあげて一人前の大人になるよう知・徳・体の修養の場であった。前浜防波堤の松葉挿し作業も記録に残っている。それ以前にも祭礼等、村の行事に密着してあったことも想像できる。このへんが青年団のルーツではなからうか。

### 戦時下の青年団

昭和十二年以降、時局対応として軍人の送迎講演会や女子青年団の発足、昭和十六年以降には、青年団長を当時の村長が務める等国策への協力が求められ、その中で、寒稽古や撃刺等指導を受けたことが『篠原村誌続編』に記されている。そしてその中で多くの若者が戦地へ赴き、殉難された。忘れてはならないことだ。

### 戦後の良き時代の青年団

終戦間もなく青年団が発足し、戦後復興と共に全国的にもその活動が盛んになっていった。そんな中から代表的な地域にとっても有意義だった活動、そしてユニークな活動を挙げておく。

- ① 馬郡分団の活動で戦後の食料不足を補うため、権十えはの南部一帯を開墾して米づくりをした(昭和二十三年度)
- ② 新人時代の田端義夫、菅原都々子を招いて篠原小学校講堂で歌謡ショーを開き盛況だった。(昭和二十五年度)
- ③ 元総理大臣の片山哲を招き篠原小学校講堂で講演会を開催した(昭和三十年度)
- ④ 浜松市内で初めて青年団新聞『篠青新聞』を創刊した。(昭和二十五年)
- ⑤ 青年団の提案で祭りが土、日曜日への変更と地域同一日開催となる。(昭和四十年度)
- ⑥ その他、各年度とも男性は二十四才、女性は一才までの青春真っ只中の若人が、球技大会や体育大会、ハイキングやキャンプ、

### 平成21年度主な活動

- ★ 山下孝先生講座
  - ① 世界文化遺産
    - ・「ボロブドール遺跡」
  - ② 自然信仰について
- ★ 本年のテーマ
 

浜松市への合併の頃の篠原を掘り起こす
- ★ 自由研究
  - ・遠州屋伝兵衛
  - ・「天地人」について
  - ・五人組元帳
  - ・経済危機とその歴史
  - ・保泉寺の火祭り等
- ★ バス旅行
  - ① 木曾路、御岳山等
  - ② 静岡県東部を訪ねる

歴代の青年団長	
12年度	鈴木丑太郎
13	鈴木 勲
14	中村明開
15	中村明開
15	斉藤増雄
16-20	当時の村長
21	鈴木久男
22	加藤 讓
23	鈴木音吉
24	鈴木忠雄
25	鈴木 清
26	刑部誠一
27	横井康成
28	河合九平
29	鈴木 勲
30	辻村政雄
31	鈴木政雄
32	山崎若義
33	河合 孝
34	鈴木恭人
35	鈴木武雄
36	河合敏司
37	安田和弘
38	田中啓雄
39	伊藤幸男
40	山下勝彦
41	山崎三郎
42	山下三郎
43	小野田将司
44	山田吉彦

(敬称略)『篠原村誌等』

見学旅行、クリスマスパーティ等の他、並行して活動していた青年学級の華道、茶道、コーラス、フォークダンス、演劇、レコードコンサート等楽しい行事に集い、この地域に活力と潤いを与えていたと言えよう。  
大変盛り上がった活動の中で数多くのロマンスが生れたことは言うまでもない。  
青年学級はしばらく続いたが追って閉鎖  
高度経済成長期以降、高学歴化や大衆向け娯楽の普及に伴う価値観の多様化で、青年層に対する青年団の求心力を失い、社会的役割を終え、昭和四十四年度を最後に解散した。  
浜松市の補助を受けてその後も継続していた青年学級も、平成に入り青年学級振興法の廃止と共に青年団と同様の理由で姿を消した。

# 願いごとがかなう 「馬郡観音」

平安時代から鎌倉時代に入ると、東海道を往き来する旅人が増えた。それで、その旅人による記録も多く書かれるようになった。「東関紀行」もその一つである。その紀行の一節にわが町の馬郡観音がある。それを紹介する。

名残多くおぼえながら、この宿をもうち出でて過ぐるほどに、舞沢の原といふ所に来にけり。北・南は砂々と遙かにして、西は海の渚近し。錦花、繡草の類は、いと見えせず、白き真砂のみありて、雪の積もれるに似たり。その間に松絶え絶え生ひわたりて、潮風梢におとづれ、また、あやし草の庵、所々に見ゆる、漁人、釣客などの住みかにもあるらん。末遠き野原なれば、つへつと眺め行くほどにうち連れたる旅人の語るを聞けば、

「この頃よりとは知らず、この原に木像の観音おほします。御堂なご朽ち荒れにけるにや、かりそめなる草の庵の中に、雨露もたまりず年月を送るほどに、一年、望むことありて鎌倉へ下る筑紫人ありけり。この観音の御前に参りたりけるが、もし、この本意を遂げて故郷へむかはば、御堂を造るべきよし、心の中に申し置きて待りけり。鎌倉にて望むこと叶ひけるにや、御堂を造らば、人多く参りて、

なんどぞ、言ひなる。聞きあへず、その御堂へ参りたれば、不断香の煙、風に誘はれうち香り、闘帳の花も露鮮やかなり。願書とおほしき物、海のごとし」といへるも、頼もしくおぼえて、

## 頼もしな入江に立つるみをつくし

### 深き験のありと聞くにも

註 紀行文のはじめ「この宿をもうち出でて」は、新居橋本宿。

「東関紀行」は鎌倉時代の紀行。一巻で作者不明、京都付近に住む五十才に近い隠士が、仁治三年（一二四二）八月家を出て鎌倉に下り、約二ヶ月滞在して十月に同地を立つまで記した。和漢混淆文の典型で「海道記」「十六夜日記」と共に鎌倉期三大紀行文として、また平安期「更級日記」も含めて東海道筋を伝えるものとして知られる。

馬郡観音は、檀家が無くお堂は老朽化して取り壊された。今は空き地となった跡地に、次のような表示板が建っている。

**引佐山大悲院本尊観世音菩薩由来記**

この地に永く安置されていた観世音菩薩は、引佐細江の観世音といひ、木像一尺二寸の立像で、定朝上人の真作と伝えられる。

第六十八代後一条天皇治安元年（一〇二二）定朝上人諸国巡行の途中水窪の山住神社に山

籠りされた時、神託を感じ引佐細江の里に行き、老杉の元で七日七夜大悲十句の密文を唱え続けた。最終日真夜中に老杉の頂きが光り輝き、忽然として聖観世音菩薩が出現された。その慈悲に感激しその老杉を伐り、観音像の尊像を一刀三礼して彫り上げた。国家安民、五穀豊穡のため引佐の地に堂宇を建て安置した。

第七十六代近衛天皇久安五年（一一四九）八月天災地変があり、山崩れや洪水によって田野は流れ、山川村里は一時大海となった。この時菩薩の靈訓によりこの地に遷し、草庵を造り安置した。（この欄に「東関紀行」の概略が掲載）第九十代後宇多天皇の弘安年中（一二八三）小夜の中山の化鳥退治のため勅命を受けた上杉高実公が、下向の折当観世音にご祈願なされ、成就速やかであったと伝わる。

寛文十二年（一六七三）四月新居橋の住人片山権兵衛紀州熊野浦にて難破したが、大悲の感應を受けて助かった。その謝礼としてお堂を建立した。

以上は延宝五年（一六七七）如意寺四代理州頼禅和尚の遣した観音由来記による。この後も東海道を往来する旅人にご利益がある観音様として聞こえ、文化年間（一八〇四）江戸の商人遠州屋源八、相良屋茂七ら多くの年から大般若経六百巻が奉納された。今も毎年一月十七日の大般若法要で目にする事が出来る。

# 嘉永六年癸丑曆(伊勢曆)

鈴木家文書目録 No.76 (浜松市博物館)

伊勢曆は発行部数が多く、遠州地方もこの曆を使っていました。伊勢の曆師は曆を一般に売ることはなく、印刷した曆を御師(神職)に売り、御師の手代が神宮のお札を受持ちの地域へ配るときに、おみやげものとして添えて配布していました。また、伊勢曆は経本のように折り畳まれていて簡単に取り扱いもできました。

曆は毎年発行されますから、一年が過ぎれば用がなくなると、あとは紙として生活の様々な場面に利用されたり、燃やされたことでしょう。幸いにも、鈴木七兵衛家に嘉永六年(一八五三)の曆があったことは、この地方での使用を示す確かな証拠だといえますので、その一部を紹介してみます。

## 曆首の部分

折本の表紙を開くと

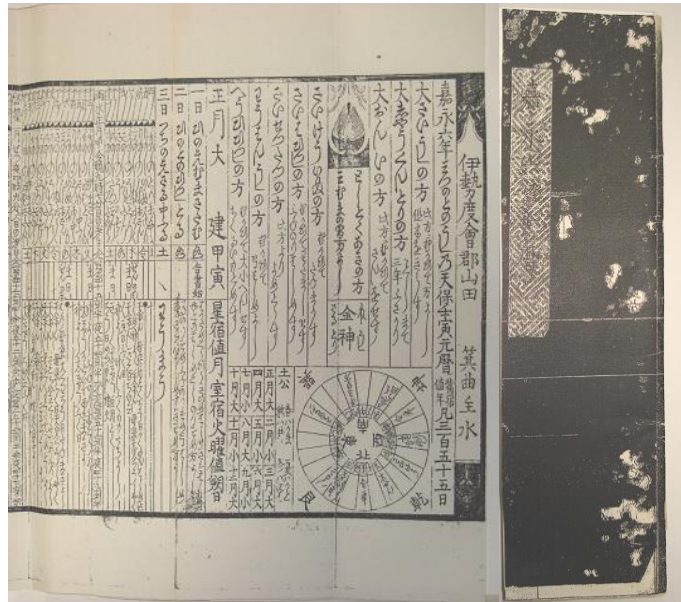
● 第一行の「伊勢渡會郡山田實曲主人」は曆の出版地と出版者名です。

● 第二行の「嘉永六年三つこのうし乃天保

壬寅元曆舊宿値年凡三百五十五日」は、

この曆が通用する年号とその年の干支および推算に使われた曆法は天保曆であったことを示します。「舊宿値年」は癸丑に二十八宿(中国の星座の区分)をあてると、舊宿にあたるという意味です。「凡三百五十五日」は一年の旧曆の総日数で平年です。天保曆は我が国で制定された最後の太陰太陽曆です。現在では、民間で行事などに利用されている

旧曆という名で残っているものです。



● 第三行からは、上・下二段に分かれており、中央上段の「三鏡宝珠形」をはさんで八将神の所在方向と主な吉事と凶事を示しています。

大きい(歳) うしの方(北北東)  
 大志やうぐん(將軍) とりの方(西)  
 大おん(陰) いの方(北北西)  
 としとく(歳徳) あきの方  
 三(巳) むま(午)の間(南南東) 万よし  
 さいけう(歳刑) いぬの方(北西)

さいは(歳破) ひつじの方(南南西)  
 さいせつ(歳殺) たつの方(南東)  
 わうはん(黄幡) うしの方(北北東)  
 へうひ(豹尾) ひつじの方(南南西)

中央の歳徳神の下には金神があり  
 ね、うし、さる、とりの方は悪い方向

● 下段の右には二十四方位名を円形で表記、左には土公神の所在場所を季節ごとに示すものと各月の大小(三〇日、二九日)です。

## 月日の部分

● 折本の大部分を占めています。最上部には各月の日付と二十四節気を、その下に干支、七曜、雑節を、最下部にはその日の吉事、凶事がのせてあります。

● 太陰太陽曆は季節とずれがあるので、それを補うように二十四節気を入れています。

● 六曜(大安、仏滅、友引など)は曆には記載されていません。

## 曆の役割

江戸時代の生活には、数値的要素が相当に入り込んでいます。村の年貢の細かい割り振りのこと、また、当地のように舞坂宿との加宿、助郷の枠組みの中での人馬の提供、運用のことは大変に重要なことでした。曆には吉凶のことが多くせられています。これは個人として考えればよく、村の行政作用には入る余地はなかったことでしょう。伊勢曆は村人個人の予定表として利用されていたものと想像しています。

# 神明宮の古い棟札

会員 袴田巨一

神明宮の参道入口の右側に神社の由緒などを記載した案内板が建てられている。

「祭神天照皇大神。豊受姫大神、本神社は伊勢神鳳抄に言う篠原村神戸九町三反とあるものに相当し、建暦二年（一一二二）浜名湖に於ける小島神明島に鎮祀せられたるものにして、永徳年間当地に移転し徳川幕府により御朱印五石を拝受する。境内の末社（通称八幡様）には大國主命、津島神社、東照宮、若宮八幡他を奉斎する。建物神明造、棟の上の甲板その上に鯉木を並べ社殿は、昭和七年に再建……参考として古いものに神明宮の棟札天正八年

（一五八〇）」とある。

坪井町の稲荷神社には天正十六年（一五八八）拜殿再建の棟札として最も古いものとされていた。神明宮のものはそれより八年前のもので、氏子の一人として是非拜見したいと思っていた。平成二十年神明宮の役員（頭）となり、境内の清掃、神事などに参加した際、戸田幸利宮司にお願

いしたところ快くお受けいただいた。祭典当日に本殿に

## 奉新造立神明外宮御寶殿壹社榎祝掛二宮一光玉殿安全

天正八年庚辰 拾貳月拾六日勸進各人御志第 村人諸用調 敬白

掛魚三掛

案内され檜作りの重厚な扉をギューという重々しい音のなか開扉され拜礼した。本殿内には十二枚の棟札が保存されていて、最も古いものは、天正八年のもので四百二十数年を経た今日でも、文字は鮮明で容易に読むことができるものであった。棟札には次のように書かれていた。

## 保泉寺の火祭り

毎年1月18日夕方、浜松市篠原町東に所在する宝洞山保泉寺（臨済宗妙心寺派）の、秋葉山三尺坊の秋葉寺篠原分院において、護摩焚きなど「火祭り」が行われる。

そもそも天竜区春野町秋葉山中腹の秋葉寺（曹洞宗可睡齋末）の寺伝によれば、弘法大師空海が秋葉山来所のおり伝えたと言われる。火祭りのクライマックスとなる「護摩焚き」は、秋葉山三尺坊大権現の真殿前で住職や関係する行者により祈祷された神聖な火を松明に移し、本堂前に積まれた護摩壇（1間×2間）の周囲を、住職を先頭に修験道の先達行者、保泉寺壇徒世話人などが一列になり般若心経を唱えながら回るものである。

行者により積み上げられた護摩壇の四方から松明の火がつけられ、その上に先達の行者が立ち、畳6畳分ほどの大きさの凧を持ち、紅蓮の炎の中で真言を唱える。



平成二十年の火祭り  
護摩焚きの様子

燃え上がる火気の勢いで凧は舞い上がり、揚がった凧（仏教の天蓋を表している）の切れ端はご利益があるとされ、信者及び参詣者の間で奪い合いとなる。次いで参拝した信者の願い事の記した護摩札が、住職と行者の手で護摩の火の中に投げ入れ燃やされる。次に行者により真剣の「剣の法」をもって、悪霊を祓い火を鎮める祈禱を行い、護摩の火が燠となったところで、先達の行者と住職を先頭に火渡りが行われる。信者ひとりひとりも裸足となって燠の上を歩く。これは汚れた身を清浄な火をもって祓う意味が込められており、火渡りをした人を厄難から除き、心願成就できるといわれている。燠の消炭や灰もまた縁起物とされて、各家庭に持ち帰り神棚に供えている。

その後寛永六年（一六二九）から安政七年（一七七八）までに十一回の新造立、修造造立が繰り返されてきた。大工は貞享三年から安永七年まで連続八回は笹ヶ瀬村の人となっていた。

浜風会会報第16号  
浜松市篠原公民館同好会「浜風会」  
（篠原地区郷土の歴史を学ぶ会）  
編集委員 委員長 鈴木清  
鈴木義雄 鈴木幹久 中山清  
鈴木忠 山下勝彦  
発行責任者 山下勝彦  
発行平成22年1月1日  
連絡先：篠原公民館気付